傍人の言

豊島与志雄

「文士ってものは、こう変に、角突きあってる……緊張しあってるものだね。」

そうある人が云った。――この人、長く地方にいて、数ヶ月前に東京へ立戻ってきたのであるが、文学者や画家に知人が多く、といって自分では何にも書きも描きもしないで、少しばかり教師をして、多くは遊んだり読んだり観たりしてるのである。実際的には余り役に立たない存在であるが、いろんな点で、私が敬愛している友人なのだ。――それが、いきなり右のようなことを云い出したのである。私には、とっさに、理解できなかった。

聞いてみれば、実は、或る記念会のことなのである。——三四十人集まった会合だが、そこに来てる文士たち、互に知り合いの仲で、挨拶をしあったり話をしあったりしていたが、その態度がおかしいというのだ。煙草の吸い方、口の利き方、笑い方、眼のつけ方……そのどこにも、ほんとに打ち解けた朗かさがなくて、わきから見てると、お互に緊張しあってる……俗に云えば、同じ職業の女同士のように、角突きあってるとしか見えない……。

「それでいて、個人的に逢えば、誰もみな好人物だし、酒をのめば、しめくくりのないだらしなさをさらけだ

すんじゃないか。それが、公の席上で顔を合わせると、好人物同士が、だらしのない者同士が、お互に緊張しあってるんだから、僕たちから見ると、おかしいんだ。」

そう云わるれば、私にだってよく分る。各方面の人々が集まってる場所では、文学者は最も率直な——無遠慮無作法だと云えるほど自由な——振舞をなすことが多いのに比して、文学者だけの集合の場合には、実際、一種の冷たい緊張した空気がかもし出されて、体面を保つというのか、気兼ねをするというのか、隙をねらいあってるというのか、とにかく、お互いに襟をつくろってておるという風になりがちである。会場か

ら外に出て、初めてほっとする者が、いくらもあることだろう。

それを、文学者の非社交性だと一言に片付けることは、妥当でない。文学者にはむしろ、人なつっこい淋しがりやが多いものだ。常住孤高な境地にあるというようなのは少ない。してみると、右のような現象は、ふだん、物を観察したり書いたりしている態度——仕事の上の一種のポーズ——それの不知不識の現れから起るのではあるまいか。顔をつき合せることによって、お互に相手の書いたものを読んでるという気持、転じて、お互に相手から読まれているという気持になるの

であろう。ところで、物を書く以上は、書くに足りるだけのものを書きたい、というほどの覚悟は誰しも持ってることだし、そうした仕事の上の心構えが、不知不識にのぞきだすのであろう。

「然し、」と友人は断乎として云う、「そんなことでは、よい作品は書けない。書かないでもよいようなものを書くのは、固より愚劣だが、よいものを書こうとする緊張感は、却って創作の邪魔になりはしないかね。緊張感のために硬ばった作品が余り多いじゃないか。」

さてそれは、分るような分らないようような……私は一寸彼の顔を見守ったものだ。

*

「君は象皮病というのを知ってるだろう。」と友人は別なことを云いだした。

その象皮病に、彼のうちの小猫がかかったことがあるというのだ。初めは単純な一寸した皮膚病くらいに思っていると、だんだん広がるに随って、毛がぬけてくる、皮膚に皺がよってくる、そしてその皺んだ禿げた皮膚が、こちこちに固くなって、丁度象の皮膚のようになってしまった。そうなると、もう回復の途はない……。

「作品だってそうだろうじゃないか。」と彼は云うのだ。

書こうという気構えからくる一種のポーズ——表面だけの緊張感、それはそのまま作品に感応して、表面がこちこちに固まった、云わば象皮病にかかったような作品になってしまう。そんな象皮病の下では、生きた血が自由に流れることは出来ない。脈搏はとまってしまう……。

それはそうだろう、が、例えば……と私が云いだすと、例えば……と彼はすぐに応じてくれた。例えば……徳永直の作品にそんなのがあった。いくらもあった。ところが、先月か先々月かの「火は飛ぶ」という作品は、あれはいい。象皮病がなおった作品だ……。

こうなると、彼はイデオロギーの問題を全く無視してるんじゃないかと、私はふと思うのである。が彼に云わせると、イデオロギーなんてものは、創作に於ては、やはり一種のポーズに過ぎないのだ。ブールジョア既成作家が、特殊な見方、特殊な取扱方、特殊な表現、そんなものに囚われて力み返るのが一つのポーズなら、特殊なイデオロギーの角度からばかり眺めるのも、一つのポーズだ。凡て物事は、弁証法的にはっきり見なければいけない。弁証法的にはっきり見る時には、あらゆる「ゾルレン」は当然否定される。「ゾルレン」を否定すれば、イデオロギーは、創作上、一つの

ポーズではないか。

単にイデオロギーばかりではない。広い意味で、凡て理想などというものもそうだ。理想を道具として使用してるうちはよいが、理想に囚われると外皮の硬化が将来される。林房雄の「青年」などは、素朴な思念に救われているが、あれがもっと年をとり、もっと凝り固まると――云いかえれば、詩が観念になると、案外、象皮病にかかりそうな恐れがないでもない。ましてや、公式的作品については云うまでもあるまい。

と、ここまでくると、この論者、あらゆる精進を、すべて排斥するかに見える。しかしそうなってくると、

例えば、広津和郎の「故国」など、最も立派なものと云わなければならないだろう。労を惜しんだ取扱い方、作意の沈潜の足りなさ、ディレッタンチズムの匂いのする筆致、それが、却って、あらゆるポーズから解放されたものと云わなければならないだろう。

「誤解しちゃあ困る。」と彼は叫ぶ。「君は、日本画と洋画とのそもそもそもの出発点の相違を、はっきり区別しないものだから、そんなめちゃやなことを云うのだ。」

これはまた、おそろしくめちゃやな論理の飛躍をやってのけたものだ。

＊

日本画は元来、物の輪廓を取扱うものだし、洋画は元来、物の面を取扱うものだ。輪廓を取扱うからして、筆勢とか墨色とかが重大な問題となってくる。ところが面を取扱う場合には、何よりもヴォリュームが目指されなければならない。光や色はその次の問題だ。ヴォリュームを取失った洋画は、まずだめなものだ。

「ヴォリュームにじかに迫ってゆくということ、それを文学者がもっと真面目に考えてみないのを、僕は不思議に思うね。少くとも、自然主義に毒されたリアリズムの、本当の進路は、そこにあるんじゃないか。勿論、現実を無視するんならそれまでだけれど……。」

これは、分る人にははっきり分るだろうし、分らない人にはさっぱり分らないだろうところの、謎みたいな論だ。が彼にとっては、如何にもはっきりしてるらしい。思想とか形式とか表現の技巧とかいうようなものは、光や色であって、実体は——現実は、ただヴォリュームだというのである。そして、ヴォリュームにじかに迫ってゆくこと、それを把握しようとするあらゆる努力、それこそ仕事の本質であって、その本質を取失う時には、凡てのことが一種のポーズとなる。

……かも知れない、と私も思う。然しそんな初歩の素朴な議論は、吾々はとうの昔に通りすぎている。そ

れから先のことが当面の問題である。
それなら仕合せだ、と彼は云うのである。ところが実際に於いては、往々、通りすぎることが取失うことになる。人は食べたものを悉く消化吸収するものではない。大部分をそのまま排出する。だから、素朴な議論を何度もくり返す必要が生じてくる。殊に、文学が生活からの逃避場でなくなり、生活意欲を多分に含む時代に於て、そしてそういう時代に、ファシズムが流行したり、ボルシェヴィズムが勢力を得たり、あるいは新たな精神的――心理的――領土が開拓されたりする時に当って、これをなお云えば、欲望と強権主義と

が相剋し、また、肉体と精神とが乖離する時に当って、益々その必要が生じてくる。現に、文学者たちの会合で、各人が一番窮屈なポーズをとってる事実は、その必要を立証する以外の何物でもない。光や色のことではなく、ヴォリュームのことを考えてる時には、人はもっと暢達たる風貌になるものだ。

然し、余り素朴的にのんびりしていたのでは、結局凡俗に堕するのみだ、と私は考えるのである。

その凡俗がいいのだ、と彼は主張する。フローベルがボヴァリー夫人を書き、ツルゲネーフがバザロフを書き、イプセンがノラを書き、ブールジェーがロベー

ル・グレルーを書いて、文学的ばかりでなく、社会的にも問題をひき起したのは、何も特殊な深遠な思想を披瀝したからではない。山本有三が、親子の問題や女中の地位の問題と、真正面から取組んでも、誰もつまらないという者はあるまい。

だから、書き方の如何によるのだ、と私は云う。

だから、ポーズということが問題になるのだ、と彼は云う。

こうなると、循環論だ。それでも、文学者に対しては傍人たる彼の言、以て他山の石とするに足るものを持っている……或は、より以上のものを持っている、

とも思えないでもない。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」
未来社
１９６７（昭和42）年11月10日第1刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００６年４月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。